OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	桃源瑞仙『百袖襖』の文章
Author(s)	山中, 延之
Citation	日本語・日本文化. 2013, 39, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50774
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

桃源瑞仙『百衲襖』の文章

山中　延之

一、本稿の目的

桃源瑞仙（一四三〇～八九）は室町時代の学僧であり、桃源の著した『周易』（易経）の注釈[1]が『百衲襖』である。桃源は、室町時代の口語資料として知られる抄物の著者として著名であり、『百衲襖』も室町時代を代表する『周易』の抄物として評価されている。ひとつの抄物資料の中には漢文・漢字カナ交じり文が混在することが多いが、その中でも特に、漢字仮名交じり文に多く含まれる口語的な部分が日本語史料として活用されてきた。

『百衲襖』もこれまでに日本語史料として『時代別国語大辞典室町時代編』（三省堂）や大塚（一九九六）等において引用・考察がおこなわれてきたが、『百衲襖』そのものを中心に据えた研究はほとんど行われてこなかった[2]。以下にその試みの一つとして、桃源の学術に対する態度を『百衲襖』から引用し、その意味を考察してゆきたい。

なお、引用は京都大学附属図書館清家文庫蔵二十三冊本（本稿では「京大二十三冊本」と呼ぶ）に拠り[3]、稿者の判断で適宜句読点・濁点を補う。現存する『百衲襖』は他にもいくつかあるが[4]、京大二十三冊本のみが完本であることと、『百衲襖』諸本のうち唯一全文が公開されていることから底本として用いることにした。

二、桃源瑞仙の生涯と易学

『百衲襖』の表現を探るに先立ち、著者桃源瑞仙について述べることから始めたい。

まず桃源瑞仙の年譜を掲げる。以下は、桃源の伝記研究である今泉（一九九三）[5]等を参照して講学関連の事跡をまとめたものである（特に本稿に関わりの深い事項を**ゴチック**とした）[6]。

【桃源瑞仙略年譜】

永享二年（一四三〇）　六月十七日、近江国市村に生まれる。父は市村備後守数信（法名は年登居士）。同三年、生母没。同五年、出家。同年ころ父が再婚。同十三年、相国寺に入る。

文安二年（一四四五）　この頃、易を竺雲等連・瑞渓周鳳・清原業忠から学ぶ。その他諸学を学ぶ。

康正元年（一四五五）　この頃、易学関連書の収集に努める。

長禄三年（一四五九）　五月、『漢書』を竺雲等連に学ぶ。また、この頃、『史記』を牧仲梵祐に学ぶ。

応仁元年（一四六七）　応仁の乱勃発を受け、八月二十四日、京より近江国市村へ帰郷する。のち永源寺へ向かう。

文明六年（一四七四）　八月二十一日より『百衲襖』の講筵を開く。

文明七年（一四七五）　この頃、蘇東坡詩を講じた（弟子の一韓智翊が『蕉雨余滴』としてまとめ、のち『四河入海』（『抄物資料集成』『抄物大系』所収）に収められる）。

文明八年（一四七六）　一月二十一日より『史記抄』の講筵を開く。

文明九年（一四七七）　閏正月、東坡詩・山谷詩・碧巌録を講じる。**三月一日、『百衲襖』成る。**

文明十二年（一四八〇）三月二十九日、『史記抄』成る（『抄物資料集成』『史記桃源抄の研究本文篇』所収）。

文明十三年（一四八一）帰京し、等持寺住持となる。帰京後（年次は不詳）、公卿に易を講じた。

文明十四年（一四八二）二月十日、景徐周麟に『漢書』列伝を講じる（景徐による聞書他が『続抄物資料集成』所収）。
延徳元年（一四八九）　十月二十八日、示寂。六十歳。

さて、桃源は、諸学のうち、特に『周易』に心を入れて学んだと思われる。右の年譜に「康正元年（一四五五）この頃、易学関係の書の収拾に努める」とあるのは、次の『百衲襖』の記事に拠っている。

①余二十年前有意学易。故売書即嚢底、凡有易之書抄、則無不収取写。牧首座所抄者五冊、『易上経乾伝第一』巻末有聖徒花押(ア)、『正義序説』并『八論』一策、『大易断例』并諸図一策、本朝平善甫中正所撰『觿耑筭法』一策、及与『命期訣』也。牧首座(イ)何人哉。悪筆甚於余。不足上人眼。而聖徒所伝、妙処不為少矣。（京大二十三冊本『百衲襖』第八冊75ウ）（波線は山中が施した。以下同じ）

（訓読）余、二十年前意有りて易を学ぶ。故に書を売れば嚢底を即き、凡そ易の書抄有れば、則ち収取し写さざる無し。牧首座抄する所の者五冊、『易上経乾伝第一』巻末に聖徒の花押有り、『正義序説』并びに『八論』一策、『大易断例』并びに諸図一策、本朝平善甫中正所撰『觿耑筭法』一策、及び『命期訣』となり。牧首座は何人なるや。悪筆余より甚だし。人の眼に上すに足らず。而れども聖徒の伝ふる所、妙処少なしと為さず。

（大意）私は、二十年前に志あって易を学んだ。そこで書物を売り払って（資金とし）、易の書や注釈があれば、手に入れたり書写しないことがなかった。（その時手に入れたのは）牧首座が書写したもの五冊（であり）、（その一冊目は）『易上経乾伝第一』巻末に（南禅寺の僧）聖徒明麟の花押のあるものであり、（第二冊目は）『正義序説』并びに『八論』一策、（第三冊目は）『大易断例』并諸図一策、（第四冊目は）わが国の平善甫中正の著した『觿耑筭法』一策、最後は『命期訣』とである。牧首座が誰なのかを知らない。文字の拙いこと私以上である。人に見せるようなものではない。しかし、聖徒の伝授したものであり、優れたところが少なくない。）

波線部からは、易書のためには他の書を売り払うこともいとわず、資料の収集に努めたことがうかがえる。『史記』も『周易』も、桃源が若いころから学びつづけてきた漢籍であるが、このように熱をこめて来歴を振り返るのは『百衲襖』に限られる。桃源の伝記資料としてのみならず、学問観を知るための資料としても注目される所以である。

三、桃源瑞仙の学術態度

抄物というのは今日の学術用語であり、それが作られた室町時代には別の呼び方があったことの例として、次の一節が引かれることがある。(9)

②其罪為尤大。豈非文公之罪人也哉。今余之此抄以王注・孔疏・程伝・朱義合而一之。又罪人之一歟。雖然倭抄不足論之。既之謂二仮名一。果有真実者耶。可笑。（京大二十三冊本『百衲襖』第十冊19ウ）

（訓読）其の罪尤も大なりと為す。豈に文公の罪人に非ざるや。今、余の此の抄は、王注・孔疏・程伝・朱義を以て合はせて之を一とす。又罪人の一か。然りと雖も倭抄之を論ずるに足らず。既に仮名と謂ふ。果たして真実なる者有りや。笑ふべし。

（大意）（朱子学者たちが『周易』を改編した）その罪はきわめて大きなものである。当然文公（＝朱子）も（『周易本義』で改編を行ったから）罪人というべきである。今、私のこの『百衲襖』は王弼の注、孔穎達の疏、程伊川の『周易伝義』、朱子の『周易本義』をまとめたものである。（易をみだりに編集しなおした私も）罪人の一人であろうか。とはいえ、仮名で書かれた注釈など取るに足りない。というのは、「仮名」と言っているものに真実などあろうはずがない。滑稽なことである。

神聖不可侵であるべき経典を改編した[10]罪から逃れることは、たとえ朱子学の祖である朱熹（＝文公）であってもできないという。しかし、桃源は仮名を用いて『百衲襖』を書いたから、罪人に数えられる必要はない、と述べる。当時の学問観としては一般的なことであるが、漢文に対して仮名文を低く見ている。

かつて、寿岳（一九六六）は、『史記抄』の和文で書かれた部分について、漢文と対比しながら、次のような問いを投げかけている。

③桃源が人に聞いてほしい、評価してほしい部分は漢文スタイルで述べられることが多いのである。誰がどう読むかの問題は別として、とにかく漢文の部分は外向けのものとしての意識によって作り出されたのであろう。そこから考えを進めるとき、一方の和文の部分はその量とは別に、内輪向けで、弟子乃至はそれに準ずるものたちへのことばのようなものであろうか。

これに対する回答として、既に大塚（一九九六）があり、②もそこに引用されている。

④寿岳章子氏は、「史記抄の文章」（遠藤博士還暦記念『国語学論集』所収）という論考のなかで、「桃源が人に聞いてほしい、評価してほしい部文は漢文スタイルでのべられることが多いのである…一方の和文の部分はその量とは別に、うちわむけで、弟子ないしはそれに準ずるものたちへのことばのようなものであろうか。」とのべる。なるほど、史記抄中に「蕉了子按」（四8ウ、六24ウ、一四17ウ）「蕉了子謂（六40オ）とまえおきして漢文で自己の見解をのべているところがあるし、「余区々于此、以仮名字而書者餘四十紙、宜哉、余之著述之不上乎人眼也」（史記抄、一三61オ）「今余之此抄、以王注孔疏程伝朱義合而一之、又罪人之一歟、雖然、倭抄不足論、既之謂仮名、果有真実者耶、可笑」（百衲襖抄、一二19ウ）といって、仮名抄の限界をなげいてもいる。そしてこのなげ

きそのものも漢文でしるされているという事実もある。しかし、またそこに、従来の習慣にしたがいながら、その半面ではあたらしい学のにない手たることを自負する意気ごみがうかがわれはしないだろうか。五山における講学盛時の、旧套を打破しようとするすがたを口語抄に見ようとするのである。

大塚（一九九六）は、桃源が和文で書いた意図を「旧套を打破しよう」としたため、と見ている。

しかし、『百衲襖』の次の記事には、むしろ、後進の育成を主眼とする教育者としての態度が濃厚である。

⑤今愚如此頭白歯豁（アバラニシテ）此様ニ抄纂スルコトハ、名聞ノタメトモ不レ思、マシテ利養ニモナラズ、取笑傍観コトナレドモ、其ヲモ不辞ゾ。只後学ヲシテ学問ト云モノハ如此スルモノト知ラシメンタメバカリナリ。又ハ此書ヨク知者ガ希ナル、自然知バヤトモ思人アラバ、一覧モセバ小補モアリヤセウズラウマデゾ。畢竟為後学ナリ。（京大二十三冊本『百衲襖』第二冊57オ）

（大意）今私が、かように頭も白く歯もまばら（＝年老いたありさま）にもかかわらず、このように（『百衲襖』を）編纂するのは、名誉のためとも思わないし、ましてや利益にもならない。はたから見るとお笑いぐさだが、それでもかまわない。（それでも編纂するのは）ただ後学の者に〈学問というものはこのようにするものだ〉と教えようという理由（から）のみである。あるいは、この書が知人もほとんどいない、（しかし）もし（何かを）知りたいと思う人がいれば、（この本に）目を通せば少し足しになることもあるだろうかというだけである。結局は後学のためである。

次の記事も「後学」が学問を積むために『百衲襖』を著したことを述べる。

⑥学ヲバ念比ニ鈍ニシタガヨウサウラウ。利根ニシテ置ケバ後ノ用ニ不立モノデサフ（候）。此様ニ抄スル事ハ畢竟後人

ソタメマデナリ。コトハサノミ不審ニハナケレドモ、人ハ不審ニカアラウズラウト思テスル処ガ多ゾ。万一是ヲ以テ不審ヲハラス事モアラバ、愚カ本意ナリ。（京大二十三冊本『百衲襖』第七冊99オ）

（大意）学問は丁寧にゆっくりとした方が良いのである。手早く行うとあとあと役に立たないものである。（私が）このように注釈書も著すのは、結局後に続く者たちのためなのである。あることが（私には）それほどわからなくはなくても、他人はわからないと思うだろうかと思って注釈を付したところが多い。もしも私の注釈で理解ができるということがあれば、私の望みは達したことになる。

⑤は、漢文・和文を含み込んだ『百衲襖』全体が後学のために書かれたのだ、ということを述べている。つまり、漢文も和文もいずれも後学のための解説であるということになる。

右のように執筆意図を述べることは『史記抄』に見られなかったことである。しかし、『百衲襖』も『史記抄』も桃源瑞仙の著作であるだけでなく、前節に見たように、執筆時期も一部重複しているのであるから、執筆意図が互いに無関係であるとは考えられない。『史記抄』の文章も、『百衲襖』の⑤にあったように、後学の者が理解しやすいように分かりやすさをねらって書かれたものであると見てよいだろう。つまり、⑤の波線部に説かれている事柄は、そのまま③波線部の疑問への回答であると考えてよいであろう。

そのほかにも、『百衲襖』には『史記抄』をはじめとする他の抄物の与えてくれない貴重な文言、例えば抄者の著述態度や言語意識が含まれている。また、『百衲襖』は『史記抄』に匹敵する分量を持つのみならず、成立時期が一部重複することなどから、互いの価値を補完しあう関係にある重要資料である。しかしその両者の比較は従来あまり行われてこなかった。次節において、あらためて『百衲襖』と『史記抄』との比較を試みる。

四、『史記抄』との比較

まず、『百衲襖』と『史記抄』との対照的な点について述べる。

両者が対照的なのは、『百衲襖』は複数の典籍に対する注釈であるのに対し、『史記抄』は『史記』という単一の対象に施された注釈である[11]という点にある。

まず、『百衲襖』は、桃源が一から編纂した手作りの研究書と言ってよいものである。第一節に述べたように、『百衲襖』の大部分を占めるのは、『周易』（易経）と宋・胡方平『易学啓蒙通釈』とに対して施された漢字カナ交じり文の注釈である。京大二十三冊本『百衲襖』でいえば、二十三冊中十五冊が『周易』の注釈であり、六冊が『易学啓蒙通釈』のそれである。実に二十三冊中二十一冊を易学の基本書が占めている。これに加え、宋・胡一桂『周易啓蒙翼伝』の引用と注釈、「命期略秘伝」が一冊ずつある。

一方、『史記抄』は『史記』の構成をそのまま崩さずに注釈が付されている[12]。

以上をまとめると、『史記抄』はおおむね師説の祖述であるが、『百衲襖』は桃源みずからが工夫を凝らした、より独自性の強い著述である[13]ということができるだろう。

『百衲襖』に学問やことばに対する省察が見られることは『史記抄』以上のものがある。これは、『百衲襖』の構成から注釈までを桃源が独りで行ったことに由来するのであろう。既に⑤で見たように、桃源が『百衲襖』を編んだ意図とは、同世代の人間から評価されるためではなく、すべては後の人が学びよいように、ということであった。⑥や後述する⑨もそれに準ずるものであろう。

次いで、前節と同じく、『百衲襖』と『史記抄』との記述が互いの内容を補い合っている場合を見てみたい。

既に多くの先学によって指摘されているように[14]、『史記抄』は牧仲梵祐の講義録を組み込んで作られており、次に掲げる箇所は、牧仲と桃源との抄の境目が明確である。

⑦自洛―此辺ニ居テ営レ洛セウト云事ゾ。有河ハ黄河ゾ。此時ハマダ鳳翔ノ辺ニ居ラレタ時ノ事ゾ。縦馬―桃林モヤガテ華山ノ東也。釈旅ハ師モヤウアルマイト云事ヲ示テゾ。箕子―家醜ヲ揚ルニ不忍シテ周ノ所宜ヲ以テ告タゾ。未集トハ未定也。穆卜―祓―齋（ツヽシミ）自為レ質（シテハラヘシ）（モノイミシテ）（チト）欲代武王トハ命ニカワラウトイノルゾ。此已上ハ牧中ノ講筵マデノ聴書、此以左ハ余続抄、皆臆決ナリ。

王曰定天保依天空　上ニ継天ノ建レ殷トキニ各氏ノ賢徳アル人ヲ三百六十夫マデアゲ進メテ、天ノ殷家ニアタヘラレタレドモ、皆大賢デハアレドモ、未能興化致理ホドニ、殷家モ大ニ光昭ニモナクゾ。サアルト云テ天ノヤガテ殷ヲ賓滅モセラレヌゾ。周書ヤ随巣子モ本ガ脱錯シテシカトモナイゾ。不顕亦不賓滅ヲ一本ニハ不願亦不賓ト作タゾ。随巣子ニハ天鬼不願亦不賓滅ト作タゾ。天鬼トハ天神也ト云ゾ。（史記抄・周本紀第四）[15]

（波線部の大意）以上は牧仲梵祐の講義録であり、以下は私が書きついだもので、すべて当て推量である。

このような境界をはさんで注釈の性格がどのように異なるのか、ということについては、柳田（一九七〇）によって次のようにまとめられている。

⑧牧中講の聞書部分では、原文の所々の語句について、原文からはかなり自由な、短い文で手際よく説明が行われているのに対して、桃源自身が抄した部分では、説明が史記の原文にそってかなり精しく忠実に行われ、一文も長くなり、原文や注の訓読文に近い説明も見える。

右は『史記抄』の分析にもとづく解釈であり、『史記抄』本文には、なぜ桃源の注釈は牧仲より長いのか、ということの説明はない。しかし、前節同様、この問題にも『百衲襖』に回答が示されている。

⑨易ハアレコレマギル、事ガ多テ、シカモ人ガ罰ガアタルト云テ畏レテ細々ニモ取アツカワヌホドニ、人ノツヨク不レ熟モノナリ。サルホドニソコ〳〵デ云ワネバ心得ニクイホドニ、クドキヤウナレドモ申スナリ。（京大二十三冊本『百衲襖』第十九冊18ウ）

（大意）易というものはあれこれ紛らわしいことが多くて、そのうえ人々は「（易を学ぶと）罰が当たる」[16]と言って畏れて丁寧に読まないので、人々がよく学びとることができないのである。だからその都度言っておかないとわかりにくいので、くどいようだが言うのである。

⑤に見たように、『百衲襖』は目の前にいない「後学」を念頭に置いて注釈を施したものであるから、ある程度の冗長さはやむを得ない、とあらかじめ断っているのである。ことば数が多くなりすぎるのを厭わないという態度は、次の記事にも見られる。

⑩只学問ヲバ鈍ニシテ知コトノ利根ナガヨウサフ。何デカアルラウ、利根サウニシテヲケドモ、未断ナレバ我ガ用ニモ難レ立、マシテヤ人ノ用ニ立ツコトハ思モヨラヌコトゾ。サウシテ置ベキナラバ、学問シテハ无益ナリ。只我ハ学問シタト云名聞バカリナラバ不知ゾ。其モ名聞ニモナルマイ。（京大二十三冊本『百衲襖』第二冊57オ）

（大意）ただ、学問というものはゆっくりおこない、（本質を）知ることにおいて鋭敏なのがよい。まったく、鋭敏に見えはするが実は中途半端であるならば自分の役にも立ちにくく、そのうえ他人の役に立つことは思いも寄らないことだ。そうして（＝生半可な学問のまま）うち捨ててよいのならば、学問をしてもよいことはない。ただ自分は学問をしたのだという名誉だけならば、私の関知するところではない。（ただし）それはもう名誉とも呼べないだろう。

右に見てきたように、桃源は自らの注釈が長いという自覚を持っていた。

その特徴は、同時代に同じく易の抄として著された柏舟宗趙の『周易抄』と比較した場合、どのように現れるであろうか。

五、柏舟宗趙講『周易抄』との比較

柏舟宗趙[17]（一四一四～九五）は、当時易学の本場とされていた足利学校で易を学んだ禅僧で、文明九年（一四七七）に横川景三（一四二九～九三）・景徐周麟（一四四〇～一五一八）という二人の後学に講義をおこなった。『周易抄』は、横川・景徐の二人がその講義を筆録して完成したものである[18]。

柏舟宗趙と桃源瑞仙との間には、易学をめぐって交流があった。これは、互いの易の抄の中に相手の名前が見られ[19]、また、二人が同時期に近江国永源寺に暮らしていたことから明らかである。

しかし、どちらかが他方の抄を引用した箇所は見られない[20]。つまり、『史記抄』のように二つの抄物が混合した形跡は見られない。そこで、両者はそれぞれ独自に成立したものと考えることができる。

したがって、原典の同一箇所を注釈した部分を比較することにより、両者の特徴が浮かび上がるであろう。

まず、文の長さを比較し、『史記抄』に見られたのと同じく、桃源の注釈が長いのか否かを確かめてみたい。次に掲げるのは、第一の卦である乾卦の一部分である。卦は、陰陽を六つ重ねることによって六十四通りのパターンを生み出すが、その陰陽ひとつひとつ（爻と呼ぶ）は下から数えることになっている。陽は「九」、陰は「六」と表す。最下段は「初九」もしくは「初六」と呼び、二段目は「九二」もしくは「六二」と呼ぶ。三・四・五段目は二段目と同様であるが、最上段は「上九」「上六」と呼ぶ。以下は乾卦「初九」の冒頭である。

【桃源瑞仙『百衲襖』】

⑪初九……（『周易正義』によれば）「居第一之位、故称初。以其陽爻、故称九。」此ハ先ヅ初九ノ二字ヲ解スルナリ。言ハ易ノ卦ハ下カラ重アゲタモノヂヤホドニ、イツモ定テ下カラ始ルゾ。サルホドニ下ヲ第一位ト云ナリ。第一デアルホドニ、初トハ云ゾ。（京大二十三冊本第九冊19オ）

（大意）『周易正義』に「はじめの位にあるので、「初」という。それが陽であるので、陽を象徴する数「九」で呼ぶ」とあるのは、まず「初九」の二字を解釈したのである。その意味は、易の卦は下から上へ重ねあげたものなので、いつも決まって下から始めるのだ。だから下を第一の位というのだ。第一だから「初」というのだ。

【柏舟宗趙講『周易抄』】

⑫初九―下ヲ初ニスルホドニ、下ノ一ヲ初ト云ゾ。（両足院本『周易抄』巻一4ウ）

（大意）（易の符号のもっとも下を「初九」と呼ぶのは）下から数えるので、最下段を「初」というのである。

一見して明らかなように、『百衲襖』の方が注釈が詳細である。『百衲襖』が『周易正義』を引用し、ほぼそれを逐語訳する形で注釈をくわえているのに対して、『周易抄』は要点のみをまとめている。

続いて『周易』の題についての注釈を比較する（『百衲襖』のその部分の注釈は四丁半におよぶため、大幅に省略した）と、こちらも右と同様、『百衲襖』が諸書を引用しながら逐語的に注釈して行くのに対して、『周易抄』は簡潔である。

【桃源瑞仙『百衲襖』】

⑬周易上経乾傳第一

「周」ハ代ノ名ナリ。「易」ハ書ノ名ナリ。夏ニハ連山ト云、殷ニハ帰蔵ト云、周ニハ易ト云、是也。易ニハ三ノ名アリ。一ハ変易也。二ニハ不易也。三ニハ簡易也。此ハ『正義』ノ八論ノ第一ニ論ジタル義ナリ。『朱子本義』ニハ交易・変易ノ二義マデナリ。…（『本義』の引用・解釈は略す）…

「上経」ハ易ノ為書也。其簡袠重大ナリ。故ニ分テ為二上下両篇一ナリ。経ト云ワ聖経賢傳トテ聖人所作ヲバ曰レ経トナリ。…（中略）…

「乾伝」ハ此ガチット不審ナ事ゾ。周易上経乾伝第一トアルハ上経ハ三十卦ノ伝デアルヲ乾伝第一トシタハ乾卦バカリノ伝ガ上経ニアル様ニ見ヘタゾ。…（中略）…

「第一」ハ説文ニ「第ハ韋束之次第、或从竹作第」。『広韻』、「次第也」。『増韻』、「第宅」。『漢書』注、「孟康曰、有甲乙次第、故曰第也。韋束之次第、或从竹作第」ト云モ殺青ノ簡ヲ韋デ編ダ様ニ見ヘタゾ。サル時ハ何ニモ次第ハアラウズレドモ書籍ガ本デアラウゾ。一ハ数之始也。（京大二十三冊本第九冊7オ）

（大意）「周」は王朝の名である。「易」は書名である。夏王朝では「連山」といい、殷王朝では「帰蔵」といい、周王朝では「易」というのがそれにあたる。易という文字には三つの意味がある。一つは「変わる」ということ、二つ目は「変わらない」ということ、三つ目は「簡単である」ということ。これは『周易正義』の「八論」の第一に論じてある意味である。『朱子本義』には「とりかえる」「かわる」の二つの意味しか載せない。…（略）…

「上経」は易の第一巻である。（易は大部なので）書物とそれを包む帙が大きい。そこで上下に分けたのである。経というのは「聖経賢伝」というように、聖人の著作を「経」と言うのである。…（略）…

「乾伝」というのが少し分かりにくいことである。「周易上経乾傳第一」とあるうち、「上経」は（六十四卦の前半の）三十卦の伝のことだが、「乾傳第一」と書いたのでは、上経には乾卦の伝しかないように見える。…（略）…

「第一」は『説文解字』に「第韋束之次第、或从竹作第」とあり、『広韻』に「次第也」とあり、『増韻』に「第宅也」とあり、『漢書』注に「孟康曰、有甲乙次第、故曰第也。韋束之次第、或从竹作第」とあるいずれも殺青した札を革紐で編

んだように見えたということである。ということは、何ごとにも「次第」と言うことはあるが、書物について言うのが本来であろう。「一」は数の初めである。

【柏舟宗趙『周易抄』】

⑭周易上経乾傳第一

易ヲ伏羲ノシタ、文王ノシタト云ハ、事ニ顕レタ易デコソアレ、无始无終ヨリ易ハアルゾ。天地已前ヲ大極ト云。大極ト云モ散々ノコトゾ。真実ニ易ハ名ヲツケラレヌゾ。（両足院本第一冊1オ）

（大意）周易上経乾傳第一（題名）

易というものを、古代の聖王伏羲が作ったとか、周の文王が作ったというのは、目に見える形の易ではあるが、世界の始まる前から易はあるのである。天地が生まれる前を大極という。（しかし）大極というのも不正確なのである。実のところ、易というのは名を付けられないのである。

『百衲襖』は逐次的な語句の解釈に詳しい。必要に応じて他書を引用する際、引用が長くなることをいとわない。それに対して、『周易抄』は題名のうち「易」の一字に集中して説明を加え、その他の字句には触れていない。柏舟が最も重要だと判断した箇所のみを深く掘りさげる方針をとっている。他の箇所で『周易正義』などを引用することもあるが、『百衲襖』に比べて引用は短い。

『百衲襖』は博引旁証ゆえに必然的に長文となり、『周易抄』は要点主義のために簡潔であるとまとめられるだろう。[21]

六、おわりに

『百衲襖』を読むことによって、桃源瑞仙の言語意識や抄の方針、さらには桃源の抄物のことばの性格をも知ることができる。

桃源が言葉を尽くして注釈を行ったことは、桃源独りの営為にとどまらず、抄物史の広い範囲におよんでいる。抄物の歴史は、文明年間（一四六九～八六）を中心とする前期と、天文・永禄年間（一五三二～六九）を中心とする後期に二分することができると考えられているが[22]、この二つの時期は断絶しているのではない。前期の第一人者である桃源は、同じく相国寺の禅僧・景徐周麟に学問を伝え、その景徐は弟子・惟高妙安に教えを伝えた。惟高妙安は後期を代表する抄物著作者として、『詩学大成抄』『玉塵』の大著をのこしている[23]。言葉を尽くして説明するということは、桃源から惟高にまで伝わっているのである。抄物の歴史を展望するとき、桃源はその出発点のひとつとして大きな位置を占める。

『百衲襖』は大冊であり、今回採りあげなかった部分にも興味深い事象が多くのこされている。今後も考察を進めて行きたい。

註

（1）『百衲襖』の注釈対象については別稿にゆずる。本稿第四節で簡略な紹介をおこなった。

（2）『百衲襖』に焦点を当てた研究に以下のようなものがある。諸本の整理と簡略な解題を備えた大塚光信（一九七六）や、漢字音注記のうち清濁に関することがらを他の抄物と比較した来田隆（一九七一）、漢字に付された声点を考察した湯沢質幸（一九八一）などである。

（3）『百衲襖』の諸本については、大塚（一九七六）に詳しい。

（4）『百衲襖』諸本については、大塚（一九七六）に詳しい。
（5）他に、新村出（一九〇六）、芳賀（一九五六）、玉村竹二（一九八三）がある。
（6）桃源は、文明十三年（一四八一）の帰洛以降、聖俗の諸事に携わることが多くなった。詳細は今泉（一九九三）を参照。
（7）聖徒明麟。室町時代の禅僧。生没年未詳。南禅寺の住持を務めた。
（8）大塚（一九七六：注（25））によれば、この「牧首座」は桃源に『史記』を授けた牧中梵祐ではなく、義堂周信の弟子・天岩□[不明]牧のことである。
（9）例えば、大塚（一九九六）十ページに引用されている。
（10）本来、『周易』は経本文とそれに対する注釈とがそれぞれ別の書物としてまとめられていたが、それではただちに注釈を参照できず不便なため、後代の学者は経本文を短く区切り、注釈をはさみこむことで見やすくした。
（11）『史記抄』も厳密に言えば、複数の『史記』の刊本に対する注釈であるが、ここでは問題としない。大島（一九三九）によれば、『史記抄』のうち、牧中梵祐の聞書を利用した部分は南宋・慶元年間に刊行された黄善夫本（集解・索隠・正義の三注合刻本）に基づいている。一方、桃源が独自に抄した部分は元・中統年間の刊本（「中統本」。集解・索隠の二注のみ有する）に基づいているという。
（12）ただし『史記』の巻序どおりに注釈が書き進められたわけではない。
（13）足利（一九三二）に拠れば、本文の解釈に桃源独自のものが見られる。
（14）新村（一九〇五）、三ヶ尻（一九三八）、大島（一九三九）、柳田（一九七六）。
（15）この他に「司馬相如列伝第四十七」にも「已上ハ聴書ナリ。祝融驚―驚ハ警ノ心歟。警而蹕ノ義デゾアルラウ。祝融以下ハ統抄臆旨分ナリ。」とあり、両者の抄の境界が明確である。
（16）五十歳以前に易を学ぶと早死にすると言われていた。今泉（一九八九）参照。
（17）柏舟の伝記は、玉村（一九八三）を参照した。横川・景徐についても同書に詳しい。
（18）『周易抄』跋文参照。鈴木（一九七二）の口絵に京大蔵本の跋文影印があり、今泉（一九九三）に翻刻されている。
（19）『百衲襖』（京大二十三冊本第一冊）は柏舟から易を学んだことなどを記し、『周易抄』〈巻一〉は桃源の説を紹介している。
（20）成立の早いのは桃源の『百衲襖』であるから、引用が見られるとすれば、『百衲襖』から柏舟の『周易抄』へのそれであ

るが、稿者が両者を比較した限りでは、明確な引用は見付けることができなかった。

（21）『周易抄』が簡潔なのは、講義を受けた僧がすでに一定の学問を身につけていたためでもあるだろう。横川景三（一四二九～九三）は桃源より一年年長、景徐周麟（一四四〇～一五一八）は同じく十歳若く、『周易抄』のもととなった講義がおこなわれた文明九年（一四七七）にはすでに中壮年に達している。

（22）柳田（一九九八）等参照。

（23）大塚（一九九六）に指摘がある。

引用文献

『百衲襖』…京都大学附属図書館清家文庫蔵本（請求番号　1―62エ7）のインターネット公開画像による。
＊登録書名は「易抄」（http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/s145/s145cont.html）
『史記抄』…京都大学附属図書館清家文庫蔵本（請求番号　5―42シ1）のインターネット公開画像による。
（http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/sa3/sa3cont.html）
その翻刻である、次の文献も参照した。
亀井孝・水沢利忠（一九六七～六九）『史記桃源抄の研究　本文篇』日本学術振興会
『周易抄』…建仁寺両足院蔵本の実見による。

参考文献

足利衍述（一九三二）『鎌倉室町時代之儒教』日本古典全集刊行会
今泉淑夫（一九八九）「易の罰があたること―中世における周易学習をめぐって―」安田元久先生退任記念論集刊行委員会『中世日本の諸相　下巻』吉川弘文館
――――（一九九三）『桃源瑞仙年譜』春秋社

大島利一（一九三九）「桃源瑞仙の史記抄を読む」『東方学報』第十冊第一分
大塚光信（一九七六）「史記抄について」『抄物資料集成第七巻』清文堂（同（一九九六）所収）
――（一九九六）『抄物きりしたん資料私注』清文堂
――（二〇〇七）「史記抄」の項、飛田良文他編『日本語学研究事典』明治書院
来田　隆（一九七一）「抄物に於ける「清」「濁」注記について」『国語学』八四（同（二〇〇一）『抄物による室町時代語の研究』（清文堂）所収）
寿岳章子（一九六六）「史記抄の文章」『国語国文』三五－三（同（一九八三）『室町時代語の表現』（清文堂）所収）
新村　出（一九〇六）「桃源瑞仙の事蹟」『史学雑誌』（（一九七二）『新村出全集第九巻』（筑摩書房）所収）
鈴木　博（一九七二）『周易抄の国語学的研究』清文堂
玉村竹二（一九八三）『五山禅僧伝記集成』講談社
芳賀幸四郎（一九五六）『中世禅林の学問及び文学に関する研究』日本学術振興会
三ヶ尻浩（一九三八）『史記抄』油印本
柳田征司（一九七〇）「史記抄の本文について―漢書抄との関係から―」安田女子大学『国語国文学論集』一（同（一九九八）に「第二節　桃源瑞仙聞書・抄『史記抄』の本文について―『漢書抄』との関係から―」として収録）
――（一九九八）『室町時代語資料としての抄物の研究』武蔵野書院
湯沢質幸（一九八一）「室町期禅林における声点―百衲襖を中心として―」『山形大学紀要』（人文科学）九－四（同（一九八七）『唐音の研究』（勉誠社）所収）

〈キーワード〉桃源瑞仙、『百衲襖』、抄物、日本語史

Tōgen Zuisen's Composition Seen in "Hyakunō'ō"

Nobuyuki YAMANAKA

桃源瑞仙 Tōgen Zuisen (1430–89), a Zen priest in Muromachi era, is the author of "百衲襖 Hyakunō'ō," which is a commentary on "周易 Shūeki (易経 Ekikyō)". Such books are called 抄物資料 Shōmono materials. They are known as spoken language materials in Muromachi era.

According to "Hyakunō'ō," Tōgen commented "Shūeki" intentionally with many words to give thoughtful and scrupulous explanations for the younger generation. In addition to this, "Hyakunō'ō" will tell us his linguistic consciousness, his policy of noting, and the nature of his language. Therefore, for example, "Hyakunō'ō" should be referred to when we read and untie Tōgen's "史記抄 Shikishō."